

三上智恵『証言 沖縄スパイ戦史』

(2020 集英社新書)

佐喜真 彩

(一橋大学・院)

「沖縄戦史」に「スパイ」の語を埋め込む形で名付けられた本書は、沖縄戦としてよく知られる中南部の激しい地上戦に対して、北部や離島で秘密裡に遂行されたゲリラ戦をその裏舞台に位置づけ、沖縄戦史を新たな角度から照らし出すことを試みている。本書は、2018年夏に公開されたドキュメンタリー映画『沖縄スパイ戦史』（三上智恵／大矢英代共同監督作品）の内容を基に、その中に収めきれなかった証言に加え、映画公開後新たに語り出された証言、さらにゲリラ戦を統率した陸軍中野学校出身の隊長らや、スパイ視住民虐殺の被害者及び加害者双方に関する証言と資料調査によって明らかにされた最新の情報などが盛り込まれ、書物として再構成されたものである。

本書では、「スパイ」という言葉は多義的に使われる。まず、敵を欺き情報を得るというその語がもつ基本的な意味に則せば、ゲリラ隊員養成所とでもいえる陸軍中野学校出身の工作人員たちが、その指揮下に置いた護郷隊の少年たち（14～17歳の地元の少年たち）を米軍の陣地や収容所に送り込み、情報収集や食糧庫・弾薬庫などの爆破をさせたということである。しかし、沖縄戦の文脈において「スパイ」という言葉を聞くとき、誰もが、上述した基本的な意味よりも、日本軍による住民虐殺を想起することは言うまでもない。住民を介したスパイ作戦に反して——それゆえにと言った

方が良いか——軍事機密が敵軍に漏れることを恐れた日本軍は、防諜対策を強化し通敵＝スパイになることがないように住民を「始末のつく」状態へと導いた。他方で、米軍の宣撫工作に乗るなど「始末の悪い」住民に対してスパイ嫌疑をかけるようになる。戦局が悪化するにつれて軍事機密漏洩の恐れが強まることで招いたのは、住民をスパイ視し、実際に「始末をつける」行為である。その対象は、米軍への投降を呼びかける者や日本軍へ協力をしなかった者などに加えて、軍事機密に関わった地域の指導者やその作業に狩り出された人びと、戦争傷病者となり移動が困難になった者にも及び、殺害事例はさまざまである。また、沖縄戦終了後も敗残兵として北部の山中に立て籠っていた日本兵はスパイリストを持ち、その順番に従って住民を殺害したという目撃情報や、住民同士がスパイの疑いをかけあった証言も綴られる。ゲリラ戦で重要視されたスパイ作戦、住民に対するスパイ嫌疑、そして住民虐殺。これらの重層的な意味が、「スパイ」という一語に備わっている。

第一章「少年ゲリラ兵たちの証言」では、村上治夫隊長と岩波壽隊長がそれぞれ率いる第一護郷隊と第二護郷隊に所属していた少年ゲリラ兵たちが経験した訓練や戦場の証言が綴られる。証言の内容は当然多岐にわたるため要約は困難だが、彼らがまだ子どもにしか見えない背格好を利用して

敵陣地に乗り込むという任務をもっていたことは共通する。また、次章に関わる点で見逃せない点は、元少年兵たちが隊長の村上と岩波へ並々ならぬ信頼を寄せていることである。複数の元少年兵たちの語りから、彼らが村上隊長の「今日只今の事に死力を尽くせ」という訓示や護郷隊の精神教育を、戦後も生きる指針にしてきたことがうかがえる。

第二章「陸軍中野学校卒の護郷隊隊長たち」は、本書の柱となるため、少し長くなるがやや詳しく内容を記したい。第二章では、第一護郷隊長・村上治夫と第二護郷隊長・岩波壽の個人史が、隊長本人たちによって遺された資料や手記、護郷隊以外の軍人や民間人の証言などに基づき著者の想像力を膨らませて描き出される。この個人史から、村上と岩波が元少年兵をはじめとする住民たちから信望を集めたいくつかの理由が浮かび上がる。その中でも著者が集中する記述は、二人が陸軍中野学校で教え込まれた「住民の懐柔」のマニュアルである。彼らの在学中に配布されたゲリラ戦の最新マニュアル「遊撃隊戦闘教令（案）」には、住民を軍の手足のごとく徹底動員・利活用することが記される。そして、この秘密戦を遂行するために、住民を懐柔し、積極的に協力するよう誘導し、「遊撃部隊と一心同体同生共死の境地」(343)に立たせること——言い換えれば、住民を「始末のつく」状態に統制すること——が決定的に重要視されていた。隊長本人の私財を投入して住民と大宴会を催したというエピソードや、約600人の隊員の出身地や親の職業などを把握していたことが推察できる隊長の記録、護郷隊以外の軍人や住民たちが二人の隊長に示していた敬慕の念などを紹介する著者は、地域住民と良好な関係を築いていた村上、岩波両隊長の人柄を認めつつも、同時に陸軍中野学校で教育を受けた彼らの裏の顔を見出すのである。

また、一方で住民を懐柔し戦闘に利活用する戦

略が遂行されていたときに、他方では、「始末に負えない」ものや「始末の悪い」ものたちの「始末をつける」体制作りが村上隊長の主導のもと進められていた。スパイを取り締まり摘発する住民組織「国土隊」が大多数の住民に極秘に結成されていたのである。ゲリラ戦を首尾よく遂行するために、住民の動きを統制することを基本にしながら、軍の期待どおりに行動しないものをスパイとみなす。この章で浮かび上がる重要な点は、このようにスパイ言説と摘発行為によって住民に恐怖を与え、その情動を通じて人々の動きをコントロールする軍の戦略である。こうした戦略を教え込まれた陸軍中野学校出身者が、村上や岩波以外に42人も沖縄県全域に投入されていた。

ここで著者はもう一つ外せない点を指摘している。それは、秘密戦に自主的・積極的に参加する気概を住民に涵養し、マニュアル通りの考えが地域に浸透した結果、中野学校出身者がその場になくともスパイの密告や処刑が発生したという事実である。村上、岩波隊長が直接的にスパイ虐殺に関わった証言はまだ出てきていないことも本書に記される。しかし著者は、昨今の歴史修正主義者たちが問題を狭小に囲い込もうとするように、軍人が実際に虐殺を命じたかどうかということにこだわるのではない。あくまで軍隊の論理が住民の心理を統制した結果を問うているのである。

沖縄で実行された護郷隊の作戦は一つの成功例と解釈され、終戦間際には、本土決戦に備えてそれを基礎にした少年兵部隊の「国土防衛隊」が極秘に全国各地に作られた。第三章「国土防衛隊陸軍中野学校宇治分校」では、陸軍中野学校の宇治分校でゲリラ戦を学び、岐阜県の少年兵を指導した元教官と、国土防衛隊の一員だった元少年兵の証言が綴られる。著者はこの章を通じて、住民を利活用するゲリラ戦は沖縄だけではなく、全国各地で準備されていたことを強調する。この二人の証言からわかることは、沖縄戦以上に武器や物

資の欠乏状態にあった終戦間際の日本軍が、戦闘を継続するために武器に数え上げていたのは、住民の命そのものだったということである。野原さんは「住民は兵器やで、消耗品やもんね」(430)と語るが、他方で「絶対生き延びろ」「死ぬな」というゲリラの原則を証言する。一見のところ、これらは矛盾した発言に見えるのだが、後者は兵士が生き抜くことによってスパイ戦は成り立つという中野学校の論理に根差した発想である。国土防衛という究極の目的のために、状況に応じて住民の生命そのものを生／死に振り分ける陸軍中野学校の論理が、野原さんの証言からも読み取れる。

第四章「スパイ虐殺の証言」では、スパイ嫌疑をかけられた人が虐殺される現場に居合わせた人、スパイ視され兵隊に追われた人など、さまざまな角度からのスパイをめぐる証言が記される。これらの証言から、極限状態に置かれ疑心暗鬼に陥った住民たちの恐怖が狂気へと変わる集団の心理が垣間見える。

第五章「虐殺者たちの肖像」では、沖縄島北部で虐殺の首謀者としてよく名前が挙がる3人の人物が取り上げられる。著者は、親族から得られた情報や彼らについての住民の証言などから、第二章と同様に、できるだけ3人の虐殺者たちの個々の人物像を描き出すことを試みる。その作業から浮かび上がるのは、残酷な虐殺者像とはやや異なる、内部に葛藤を抱えた兵隊個々人の姿である。こうして発見された虐殺者たちの意外な側面に促されるように、著者は彼らが置かれた立場に寄り添い、虐殺に手を染めることになった経緯を想像するにいたる。個人史を掘り起こすことの意義を考えさせられる章である。

第六章「戦争マニュアルから浮かび上がる秘密戦の狂気」の前半部では、米軍が日本軍のアジトから押収したことで焼却を免れた「秘密戦に関する書類」が紹介され、その中に記された秘密組織「国土隊」(第二章既出)の存在について述べられ

る。後半部では、日本軍が戦場にいる住民を戦闘に利活用し、また秘密漏洩を防ぎながら「始末のつく状態」に管理するために、軍の上層部が検討を繰り返し作成した戦争マニュアル「戦闘教令」の変遷が跡付けられる。

ここまで、豊富な証言と情報が収められた本書の内容を簡単に紹介してきた。沖縄戦研究や歴史学の分野における本書の成果を述べるのは私には身に余るので、以下では文学を研究する者の立場として、証言を「聞く」という観点から数点の意義を述べたい。まず読者を圧倒する証言の内容が重要であることはもちろんののだが、それを記述する構成に注目したい。取材拒否を何度も突きつけられながらも、これだけの住民虐殺の証言が語り出されたのは、著者が過去を共有しようとする真摯な想いを通じて証言者と関係を築き上げたことによるだろう。だがそれでも、話題が核心部に触れようとする当事者たちは言い澁んだり、攻撃的になったり、あるいは第四章で証言する中本米子さんのように事実から自分を守るための言葉を繰り返すなどの多様な反応があったことが読み取れる。証言内容もそうだが、それ以上にその語り口から、70年前後の時間を経ても生々しい傷を内に抱えたまま当事者たちは生き続けていることを痛感させられる。著者は、一冊の書物にするために客観的な位置から証言を再構成することを試みつつも、そのような反応に直面し、想像力をどんなに駆使しても事実には追いつけないことが起きたことを何度も突きつけられる。事実をわかりやすく記述するよりも、多少まわりくどくとも、自身と証言者の間にある落差を解消することなく、そのまま記すことに著者は徹したのではないだろうか。著者と当事者の会話の齟齬から、非体験者には想像が及ばない出来事の重みが伝わってくるのである。例えば、スパイ視そのものが誤りだと言いつける現在の立ち位置からつい語り出してしまふ著者の言葉に違和感を抱く当事者の様子に、

読者の私までもが居心地の悪さを感じるのである。

著者の「聞く」という実践は、住民から証言を聞き取る時に限らず、村上、岩波隊長、および実際に虐殺を行った兵隊個人の記録や彼らに関する証言を見聞きする際にも慎重に行われているのは印象的だった。個々の兵隊たちの個人史を描き出す際に、記録や証言を一般的な加害者像に当てはめるのではなく、むしろ個々の中に生じていたであろう、さまざまな葛藤や苦しみ、国家や軍隊の意図とは微妙に異なる期待などにも想像力を広げていくのである。著者は最終部で、「残酷な日本軍」という定型句から「いくつもの事象が個別に紐解かれ、なぜ加害が発生したのか、その構図も明らかにされていく」(736)と語るが、その点を本書は全体を通じて説得的に示し得ている。沖縄戦における住民虐殺の研究は主に軍資料の分析や住民の証言を掘り起こすことを通じて日本軍の加害者性を立証してきた。本書はこれまでに蓄積されてきた知見に、兵隊個人の記録や証言から光を当て直すことで、個々人の人柄や資質がどのように軍隊の論理を自らの内に内在化させてきたのかという兵士の主体化の問題に踏み込んでいる。このような分析方法によって、軍の論理が兵隊に浸透することを決定論的に見出すよりは、どんな力が加害者と成らしめたのかを引出そうとすることが試みられているのである。

最後に、沖縄戦の証言を聞き取り、その行間を読むという作業においてジェンダーの視点が必要であることを明確に指摘する箇所は無視できない。この点について割かれた頁数は700余頁もある本書全体の中の数頁にすぎず、その点に限って言えば取るに足りないようにみえる。だが、本書のその箇所を読んで思い起こさずにいられないのが沖縄近現代思想史・歴史研究者の屋嘉比収が言い表した「仲間内の語り」である¹。第五章で虐殺者として取り上げられる海軍特殊潜航艇隊将校の渡辺大尉たちの世話をしていた3人の女性たち

について、地域住民の間で根拠のない噂や偏見が広がっていた可能性を著者はいくつかの証言の端々から感じ取る。この事例に限らず、調査の過程で、敵と通じている女、女スパイ、米兵に媚を売っていた女という虚像があちこちで立ち現れる現象に出くわしたようである。そのようにでっぴあげられた女性像や、あるいは実在する特定の女性に、「二つの軍隊と戦争に翻弄された庶民の鬱屈した気持ち」を擦りつけることで、「集団が求める物語」が形成されたのではないかという著者の指摘は重い(627)。屋嘉比が「仲間内の語り」を指摘する文脈は兵士としての男性性を誇示する証言について違和感を述べるものであり、本書の内容とは違いがある。しかし、どちらも女性なるものを蔑むことを通じて集団の物語を形成するという構造を成しており決して互いに無関係であるわけではない。

証言された内容だけではなく、語られる際の表情や身振りなども含めて、常に想像力を働かせ、言外の意味を読み取ろうとする著者の「聞く」という姿勢こそが、スパイ視による住民虐殺をめぐる問題の新たな側面に光を与えることを可能にした。歴史の底に埋もれるものを引き出すことができたのは、このような著者の創造的行為によるものであり、内容だけでなくその姿勢も含め多くのことを得る書物である。それを踏まえた上で、一つだけ気になることを述べれば、スパイ虐殺が起きた原因は沖縄県民への差別ではないと何度か記される点である。確かに六章の「戦闘教令」の変遷を追えば、仮に本土決戦が行われていれば、より悪化した事態が生じた可能性があったことにはうなずける。著者のこの分析に賛同しつつも、しかし私の中で生じるのは、「国民」が一様に兵器と化すという議論の枠組みでは、非国民というレッテルを貼られることを恐れる沖縄住民の心理や、植民地出身者の戦場の経験が隠蔽されてしまうのではないかという危惧である。沖縄住民に

とって、非国民という言葉は、単に戦時の極限状態における軍への非協力者や厄介者を意味するのではない。その言葉の響きは、植民地主義による有形無形の暴力を身体に刻み込まれた者にとって、特殊な恐怖を掻き立てていたはずである。だからこそ、そのような傷を内に抱え込んだ沖繩住民によるスパイ密告は、無差別的に生じたというより、ある程度において、「植民地主義的な位階秩序」（呉世宗）に影響されていたのではないだろうか。呉世宗が沖繩戦の戦場における朝鮮人「軍夫」や「慰安婦」たちが置かれた状況を記述するとき、「国民」の兵器化の議論枠組みではみえてこない、より複雑な支配構造が現れている。また、日本軍の兵隊と住民の接触を管理するために「慰安所」設置やその規約が利用されていたことを分析する洪ユン伸の研究もまたこのことに関わる。ここ数年に2人の研究が発表されたことを受けて、沖繩研究は加害と被害の関係の分析を日本軍／沖繩住民そして地域住民間という枠内にとどめず、その外に置かれた他者へまで視野を広げていくことが必要である。一章や四章の証言の中には、そのような他者への言及がわずかながらみられたのは特に印象に残っている。とはいえ、これまであまり注目されてこなかった北部のゲリラ戦の史実と証言を掘り起こし、住民虐殺をめぐる問題に新たな光をあてた本書は、著者の粘り強い取材と「聞く」という試みがなければ明るみに出ることのなかったであろう多様な声が、豊富にかつ丁寧に収められた書物であることは強調しておきたい。

註

- i 写真家の比嘉豊光と村山友江は、標準語によってではなく戦争体験者にとって母語である「島クトゥバ」を通じて証言を語ってもらい、これを映像「島クトゥバで語る戦世」（2003）にまとめた。屋嘉比は1970年代に開始された、住民の視点による沖繩戦体験の記

録の変遷を整理した上で、「島クトゥバで語る戦世」をその流れの中に位置付け、高く評価する。だが同時に、その中で生じている問題も指摘している。「島クトゥバで語る戦世」では、聞き手と語り手の双方が「島クトゥバ」で語ることで生まれた関係性の密度によって、証言内容やそれを語る者の表情をこれまでに見ない様態をもって浮かび上がらせたのだが、他方で、まさにその密度ゆえに他者を排除する「仲間内だけの語り」も生じた。その語りとは、具体的には、兵士として沖繩戦を体験した証言者が、薄ら笑いの表情を浮かべながら自殺未遂の同僚兵士の首を斬る話などを自慢するような話である。また、屋嘉比はその語りに、歴史学者の新崎盛暉が『世替わりの渦のなかで』で記した、中国に従軍した沖繩出身元兵士たちの証言と通底する問題をみている。その証言とは、彼らが内輪の酒の席になると現地女性に対する蛮行を誇らしげに語っていたという話である。

参考文献

- 呉世宗『沖繩と朝鮮のはざままで——朝鮮人の〈可視化／不可視化〉をめぐる歴史と語り』明石書店、2019年。
 洪ユン伸『沖繩戦場の記憶と「慰安所」』インパクト出版会、2016年。
 屋嘉比収『沖繩戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか』世織書房、2009年。